したといわれている。

二　八沢城（八沢木）物語

ある秋のこと、雄勝郡湯沢の宿に相宿をとった由利郡の松井多治という人が、夕食のおかずにでた茸の煮つけを食べないで膳を下げた。「茸は嫌いなのか」と同宿の客が聞くとその男は「いやそうではないが、私の村の産土神（鎮守の神）が茸を嫌いなので私も食べないのだ」と言った。「どこの神様か」と聞くと「私の村は保呂羽の西北にある野牛内（大内町）という村で、そこに太子堂があり、祟りのきびしい神様である」と答えた。

この村では、厠（便所）に棟を上げることを忌み、片廂であり、茸を断つこともそのためであるという。この男は、今は亀田（岩城町）に聟養子となり、麹を売りながらそちこちを歩いているうちに、茸汁を食べ、芋川に落ちてから茸汁を食べないのだとも言った。

芋川は保呂羽山の嶺から流れる川で、子吉川の上流になっている。そこに年を経た大芋があり、大蛇となって降ったので、その滝を芋滝といい、その川を芋川というと伝えられる。

昔、由利と秋田の境界争いのとき、神に詣でて牛王宝印をいただき、このお札のとどまる所が秋田領であるということで、芋の滝から流したところ、流れ流れて亀田の里にとどまったという。いまそこを牛王の瀬と言っている。この牛王の瀬まで村の人たちが出かけて田を作っていた。この田は保呂羽山の水を引いて作るものであり、一粒も仏に供えることなく、仏の米としては、本荘、矢島から買い求めて仏に供えるという習慣になったと言われる。

この男の祖父は、八沢木の生れであり、幼少のころは祖父の家に行き、守屋家などで学問を教えられた。守屋家は土地の旧家であり、多くの古文書を虫干ししているのを見たと言っていた。守屋家は八沢木村のはじめから里長の家であり、そのころからの書物は今に伝えられている。

その後、滝の沢の万之丈という人が里長の役を務め、天正の末ごろは中房村の角介が務めて、そこを里長村という。後に遠藤氏が推挙されて下居社家（下居神社の神官）となり、御神楽（霜月神楽）のときは笛役を務めたが今は神主となり、大友家と座を同じくしている。人の世は上れば上るものと語られていた。